

ろ「非構造化性向」(propensity for destructuring—筆者造語)をもち、したがって「漠構造」(筆者造語)を好む日本社会ないし日本組織の風土の中でのシステム思考の問題などの考察についても後の機会にゆずった。

システムに関連するいろいろな概念・手法ならびにそれらに関する重要な文献については3)を参照されたい。

最後に、本小論中システム科学の体系化の項については東工大大学院システム科学専攻における同僚市川信信教授から基本的な示唆をいただいたことを感謝する。

参 考 文 献

- 1) Klir, G. J., *An Approach to General Systems Theory*, Van Nostrand, 1969, 付録
- 2) von Bertalanffy, L., "The History and Status of General Systems Theory" in G. L. Klir (ed.), *Trends in General Systems Theory*, John Wiley, 1972
- 3) 「OR事典」, 日科技連出版社, 1975
(まつだ・たけひこ 東京工業大学 大学院システム科学専攻)

木間々勇造氏の発言

さわらぬ神にたたりなし

むかし、陸軍に11年式軽機関銃というのがあったそうである。1人で持ち歩いて、タンタンと連続に射つことのできる武器である。当然のことながら、このシステムでは、送弾の機能が、重要な機能の1つとなっているようだ。一方一番故障を生じやすい箇所ともなる。そこで、故障が発生してもすみやかにその回復をはからねばならない。ゆえに、重要な訓練項目の1つとして取りあげられ、訓練のテストでも重要なチェック項目となっていたと聞いている。

ところで、一方では次のようなささきも耳にしている。すなわち、

「その機関銃の送弾機能を開発したのは、現某將軍である。よって、より良い送弾機能を発案しても、その將軍が存命であるかぎりそれを取り替えることはできないのだ。やむを得ず、機能の悪さを訓練でカバーしているのだ」と。

旧軍の作り話の例を持ち出して申しわけなかったがこれに類した例は、現世のいろいろの社会のいたるところに存在しているように思える。それが、科学的で

あるべしと自負しているORの分野とか、工学系の応用分野とかに存在するとき、ことは重大であるように思える。

「あのモデルは、某先生の作ったものである。その先生が、その問題に取り組んでいる段階では、他の人々は、そのモデルの不備点や改良方法がわかっているとしても口出ししないし、触れたがらないのだ」

という声を耳にすることがある。仲間意識からする遠慮かもしれないが、上記旧陸軍の例と軌を一にするように思える。もちろん、すべてがそうであるわけではないが、このような事象の存在も事実のようだ。しかも、モデルを作った当事者のその道での権威が高いほど、この傾向が強いようにも判断される。

ところで、その当事者の支援を受ける政策執行者や、執行される側の立場に立ってみれば、不幸な話となる。権威という名声が大事か、村八分にされないようにするが大事か、有用な政策の選択そのものが大事か、むずかしいところではある。あるいは、さわらぬ神にたたりなしということかもしれない。不満点があっても、そっとしておいてやる態度を大人の態度、それを公然と指摘し対抗するのは大人げない態度と考える価値概念が世間では普遍的であるかもしれない。そうであるとき、「科学的とは何か」という素朴な反問への答の見いだしに悩む。
(木間々勇造)

▶ 今月号から「木間々勇造氏の発言」や「トップの視点」などの新顔が登場しました。

「木間々氏」は、1月号にその趣旨を説明いたしましたように、日科技連時代の本誌の〈ORマンの抵抗〉欄の執筆者のペンネームを拝借してスタートいたしました。

「トップの視点」のページは、企業や団体などの

トップの方々に、日ごろお考えになっていることや随想などを自由に語っていただくという趣旨のものです。

本号にはそれらのトップをきって、「木間々氏」には本家の木間々氏、「トップ」には前々会長であり名誉会員でもある小林宏治日電社長にご執筆いただきました。
(編集部)